

神奈川県日赤紺綬有功会

新会長に最上氏就任

全国最大級の献血など評価

日本赤十字社(日赤)の活動を支援する民間組織、日赤紺綬有功会の神奈川県会の会長に、亀井野

組織力をあげて今まで以上に貢献したい」などと抱負を語った。

の(株)湘南営繕協会社長、最上重夫氏(72)が先月15日付で就任した。最上会長は「先輩たちが築いてきた伝統を守りつつ、

同会は、日赤が展開する国際的な救護活動や国内での病院運営、献血活動などを人的に、資金的にサポートしている。発足は1964年で、半世紀以上の活動実績がある。



取材に応える最上会長

最上会長は、1990年、初めて主催した大相撲藤沢場所ので日赤に寄付をしたことをきっかけに入会。日赤が掲げる「人間を救えるのは人間だけだ」に共感し、医療機関を支える募金や献血活動などに注力してきた。特に献血に対する貢献は顕著で、毎年行われる藤沢場所と同時に全国最大級の活動として日赤からも高く評価されているほか、地域企業と連携した取り組みで献血機会の拡大にも尽力。さらに、「コロナ禍だからこそ、血液は必要」と訴え、藤沢場所は中止になったが、献血は継続。先月には日赤神奈川支部長の黒岩祐治県知事から特別表彰を受けた。

新会長の就任を推した

前会長の神谷光信氏は「バイタリティー溢れる活動で、献血など様々な事業に長年貢献してくれた」と評し「今後の一層の活動の発展に期待」とエールを送った。

新会長として「組織力の強化」と「献血意識の高揚」を掲げる。一つは会員の増強で、「より大きな支援活動をする土台を作りたい」とする。意識高揚では献血者層の拡大を考えている。初の献血でその意義、意味を痛感した高校生のエピソードを例に「献血は16歳からできる。その年代にアピールすることでこれらの善意の協力者を求めたい」と力を込めた。

建通新聞

神奈川
発行所 建通新聞社

神奈川県日赤紺綬有功会 新会長に最上氏

している。もともと社会貢献の精神があり、理解度のベースがある。建設業を中心に増強を図りたい」と意気込む。また、「単なる会員増強ではなく、実質的な献血活動に貢献してくれる人を増やしていきたい」と説明する。

神奈川県日赤紺綬有功会の第13代目会長に湘南営繕協会(藤沢市)の最上重夫社長。写真が就任した。



神奈川県日赤紺綬有功会は、「人の命を尊重し、苦しみの中にいる者は、敵味方の区別なく救う」ことを目的とし、世界192の国と地域に広がる赤十字・赤新月社のネットワークを生かして活動する。1964年に発足、現在約500人の会員で組織している。

最上新会長は「組織力を強化し、献血活動を神奈川県全体に浸透させていきたい」と抱負を語る。会員増強については、「建設業は所属する団体などを通して、清掃活動の参加や災害協定を締結

県日赤紺綬有功会会長に最上氏

支援団体として赤十字運動を推進

「会員増強に努める」



(株)湘南宮繕協会(藤沢市)の最上重夫社長(写真)は、このほど

神奈川県日赤紺綬有功会の令和3年度定例総会(文章審議)で第13代目会長に就任した。

最上会長は、神谷光信前会長の功績に対し、会の発展に努めてきたことは非常に大きな功績」と敬意を表しながら、「私たちは、苦しい人を救いたいという思いを結集し、いかなる状況下でも人間の命と健康、尊厳を守る使命があ

る」と基本理念について述べ、赤十字運動を推進していくことを強調した。そして、「今後も地域の活動に参画し、会員増強に努めるとともに支援団体としてより一層の活動を行っていききたい」と力強い意欲を示した。

また、神谷前会長は、「長年の献血活動に加え一層の赤十字事業への尽力をお願いしたい」とエールを送った。

同会は日本赤十字社神奈川県支部の支援団体として赤十字活動を円滑に推進するため、資金面など支援するほか、献血者の安定的確保と安全な輸血用血液の供給に努めるなど奉仕活動を進めている。